

1996年4月から3年間、青年海外協力隊員としてエルサルバドルで活動をしました。活動内容は、障がい者スポーツの普及・発展を目的として発足したエルサルバドル車いすスポーツ協会 (ASADESIR) において、ナショナルチームのコーチとして主に車いすバスケットボールと車いす陸上競技、車いすマラソンの指導でした。

これらの競技を主に行っていた背景には、在エルサルバドル日本大使館からの支援がありました。競技用車いすは通常使用する車いすとは異なり、あくまでも競技用に設計開発されているので日常生活での使用には向かず、また内戦を終えて間もない状況においては障がい者個人で入手するのは余りにも困難でした。

日本大使館からの援助により、バスケットボールで使用する競技用車いす、陸上競技で使用するレーサー（陸上・マラソン用車いすの総称）、車いす用室内ランニングマシン等々が車いすスポーツ協会に寄贈されました。同協会には交通事故や内戦、また十分な医療を受けられずに病気の後遺症などにより身体にハンディキャップを負ってしまった人々が数多く名を連ねていました。



そうした彼らには、私には想像もつかない絶望感を受傷当時は感じていた筈なのですが、一様に明るく陽気で前向きであったのがとても印象に残っています。彼ら全員がアスリートでした。こうした中、私の車いすスポーツ協会での活動は幕を開けました。



赴任当初、スペイン語も儘ならず右も左も分からない私を全面的に支えてくれたのが、当時車いすスポーツ協会の会長でありカウンターパートだった Jorge Ochoa (ホルヘ オチョア) でした。彼自身も歩くことは出来なかったのですが、渡日経験もある大変な親日家であり、それは今日でも変わっていません。

オチョアをはじめ選手皆が日々私に話しかけてくれたのは、少しでも早く言葉の壁がなくなり、少しでも早くアミーゴ (友達) として、本当の意味で私を迎え入れたかった気持ちの表れだったと思います。私も彼らの気持ちに早く応えたかったので、暫くは辞書を持ち歩いていました。いつの間にかそれなりにコミュニケーションが取れるようになり、日常の彼らとの会話には笑顔や笑いが絶えなくなりました。

赴任後半年ほどして迎えた、パラリンピックシドニー大会中北米カリブ地区の1次予選大会。なんとエルサルバドルでの開催でした。当時は、協会の方針でもあった車いすスポーツバスケットボールでのパラリンピック出場を目指していました。同地区にはアメリカ合衆国やカナダ、メキシコが常勝国として君臨していました。1次予選は中米カリブ地域での争いとなり上位3チームが二次予選へ駒を進めることが出来ました。私たちの目標は、キューバかプエルトリコのどちらかに勝って、3位で2次予選に進むことでした。記憶が正しければ、キューバ戦には私の着任前から指導を行っていたチャンバ（サルバドル人）が指揮を執りましたが、残念ながら負けてしまいました。

迎えたプエルトリコ戦。オチョアは私に指揮を執るように皆の前で言ってくれました。素直に嬉しかったのを今でも覚えています。結果は僅差で勝利。しかしながら得失点差で総合順位4位でした。掲げた目標は果たせなかったものの、選手一人ひとりの更には私自身の収穫は計り知れないものがありました。それは、私を見る彼らの眼差しにリスペクトを感じるようになったことです。私も想像以上に奮闘した彼らへの感謝の気持ちで一杯でした。同時に、選手らの潜在能力の高さと可能性を目の当たりにした大会でした。



赴任前から掲げていた目標の一つに、日本で開催される世界で唯一の車いすだけの国際大会、大分国際車いすマラソンへの出場がありました。1997年10月開催の大会出場に向け、オチョアに大会の歴史や意義について説明し賛同を得てからは、出場選手の選出やレー



サーの確保、資金調達や大会事務局との選手エントリーのやり取り等目まぐるしい日々でした。幾多の困難があったものの賛同してくれたオチョアを初め、車いすスポーツ協会を取り巻く多くの人々の協力と支援の下、選手1名の大会初参加を果たすことが出来ました。翌年には選手2名の参加が実現でき、彼らのチャレンジスピリットの高さを見ることが出来ました。

その他、ロサンゼルスマラソン車いす部門や、グアテマラ、ホンジュラス、アルゼンチンなどへの陸上・マラソン競技大会への参加等、選手と私にとって一つ一つが記憶と記録に残る遠征となりました。



オチョアを初め選手や彼らの家族とは、プライベートの時間も共に過ごすことが多々ありました。休日に、彼らの自宅に招待され振舞われた郷土料理や家庭料理は絶品で、今でも無性に食べたくなることがあります。また、練習後にも選手達と食事をしながら他愛もない話に花を咲かせ笑い合っていました。

2021年パラリンピック東京大会に、エルサルバドルから選手3名が出場しました。パワーリフティングではエルサルバドルで初のメダルを獲得し、記念すべき大会となりました。カウンターパートだったオチョアはCOPESA（エルサルバドルパラリンピック委員会）会長として来日し、20年振りに再会するなど私にとっても記憶に残る大会となりました。



当時は通信手段と言えば電話とFAXくらいで、赴任当時は日本との物理的距離を感じていたのですが、今では様々な手段があり利便性が遥かに向上しましたが、オチョアと実際に会って目を見て言葉を交わすことで、その大切さを再認識しました。遠く離れた国ですが、機会があれば、オチョアを初めとするアミーゴが沢山暮らすエルサルバドルにもう一度訪れてみたいと思っています。

高梨 俊行（たかなし としゆき）氏

東京都在住。JICA 青年海外協力隊平成7年度3次隊 養護隊員

1996年4月～1999年4月 エルサルバドル共和国 車いすスポーツ協会にて活動